



若鷹だより

高山市立荘川中学校
平成30年1月

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いたします。

地域と学校が協働していく素地

校長 岡本 昌昭

今から40数年前に放映された『寺内貫太郎一家』というホームドラマが、BSで再放送されています。

寺内貫太郎が、一家の主で家業の石屋（墓石など）を営んでいます。家族は、お父さん（貫太郎）とお母さん（奥さん）、長女（姉）と長男（弟）、おばあちゃんと若いお手伝いの女の子の6人です。

昭和の中頃までは、二世帯・三世帯といった大家族での生活が一般的でした。祖父母・両親・子ども（孫）が同居する中で、大勢で食事をしたりテレビを見たりするわけですから、気遣いや我慢もしなければなりません。逆に、お年寄りを敬い、家族をいたわり思いやりの心も育まれてきます。その後、高度経済成長とともに、次第に核家族化が進み、互いのプライベートを大事にした生活スタイルへと変わってきたのです。

お父さん（貫太郎）は大柄の体系、職人肌で頑固、口数が少ないのに口を開けば、いつも怒鳴っています。本当は心優しいのですが、口下手で照れ屋で、誤解を生むことが多々あります。それをうまくフォローしたり、太陽のような温かさや心の広さで家族を包み込んだりしているのが、お母さん（奥さん）です。お母さんの存在は大きいです。そんな中で、毎回、お父さん（貫太郎）の言動に長男がかみつきます。そして、きまって大喧嘩となります。おばあちゃんは、よく憎まれ口をたたきます。それでも、家族は全くいがみ合っていません。決して後に残りません。それどころか、家族のちょっとした言動に敏感に反応し、興味を示し心配をしたり悩んだりします。そして、みんなで相談をしたり、みんなで喜んだりします。おせっかい焼きな家族ですが、とても温かいものがあります。

気になったことをズバツと言う人、それを無視することなく、少し考えながらも受け入れようとする家族が、そこにあるようにも思います。

ここ20数年来、家庭の教育力が低下してきていると言われてきています。都会では、近隣の大人や子どもの名前も知らなければ顔も見ただけということもあります。

荘川という地域では、そうしたことはありません。町民の方々が子どもに目を向け、子どもの育みに関心を寄せ、どの方も積極的に支援していただけています。子どものため・学校のためということならば労を惜しまず、協力していただきます。郷土芸能を教えに来てくださる方、地域の通学路を見守ったり清掃をしてくださったりしている方、庭に咲いた花々をもって学校に届けてくださる方などなど。

これからは、より一層、少子高齢化が進んでいきます。そんな中で、地域の活力を生み出したり、地域の担い手となる人材を育成しようとする地域と連携した教育が求められています。荘川という地域には、その素地が昔から脈々とあります。

